

令和4年8月15日

小野市議会議長 岡嶋正昭 様

総務文教常任委員会
委員長 喜始 真吾

行政視察報告書

先般、実施しました総務文教常任委員会行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 令和4年8月2日（火）～令和4年8月4日（木）

2 視察メンバー

喜始真吾（委員長） 藤原貴希（副委員長）
河島 泉 前田光教 藤原 章 小林千津子 中村いづみ（事務局）

3 視察先及び調査内容

(1) 愛知県岡崎市（人口：約38万5千人、面積：387.20Km²）

校内フリースクール（F組）について

長期欠席者や集団になじめない子などに個別に最適な学びの場を保障し、多様な教育機会を確保するために校内に「F組」を設置して成果を出している。

(2) 愛知県半田市（人口：約11万8千人、面積：47.42Km²）

総合型地域スポーツクラブについて

全国的に課題となっている少子化と教員の働き方改革に鑑み、中学校の部活動を週末は家族や地域に戻していくとした先駆的モデルクラブ。

(3) 東京都町田市（人口：約43万1千人、面積：71.55Km²）

バイオエネルギーセンターについて

ごみ焼却施設とバイオガス施設を一体的に整備した首都圏初の施設。
「ごみを作らない・燃やさない・埋め立てない」を原則として、徹底したごみの減量、資源化を進め、持続可能で環境負荷の少ない都市を目指すとしている。

4 調査結果

【第1日】

愛知県岡崎市

人口 約38万5千人 面積 387.20Km² (令和2年 国勢調査)

《視察項目》

校内フリースクール（F組）について



《視察内容》

Fit、Free、Fun、Future の頭文字を取った「F組」。

愛知県岡崎市が、長期欠席者や集団になじめない子などに個別最適な学びの場を保障し、多様な教育機会を確保するために設置した校内フリースクール。全国的にも不登校が増加している中、岡崎市でも不登校を最大の課題と捉え、重点的に取り組んでおり、県教育委員会主導で校内フリースクールの設置を広げる広島県の取り組みなども参考に、市内の中学校全20校のうち、2020年度に3校でスタート。21年度に5校を増設、22年度には6校が加わり、計14校に設置された。

増設されているのは、やはり成果が出ているからで、F組設置校は非設置校に比べ、長期欠席者の増加率が抑制されており、市の適応指導教室と在籍学級との「段差軽減」にも繋がっている。

また、これまで60を超える報道関係者の取材があり、愛知県内の名古屋市や豊橋市からも視察を受け、名古屋市は導入し、豊橋市も導入予定。

理念は次の5点

- ① 適応するのは学校、学校に適応できるようにする適応指導教室ではない。
- ② 通常学級と同じ、1つの学級として扱う。
- ③ 多様性を受け入れられる、校内でも信頼の厚いエース級の教員を担任に置く。
- ④ いつでも生徒たちを温かく迎える支援員を配置。（市の予算で採用）
- ⑤ 教室復帰ではなく、社会的自立を目指す。

この理念を具現化するためにF組で取り組んでいるのが「環境」の改革で、ヒト・モノ・コトの切り口で次のような環境の整備を行っている。

ヒト：F組の担任が活動や学習のコーディネーター、支援員がファシリテーター、他の教員はエスコートランナー、そして随時、スクールカウンセラーや養護教諭がサポートに入る。

モノ：F組を新設する学校には初年度に30万円を支給、生徒がリラックスして過ごせる空間づくりのための予算を配分している。

コト：個を大切にした教育課程や個別支援計画によるサポートで、基本的には1日の取り組みや時間割は生徒自身が決める。

以上のように「チーム学校」として取り組む体制が構築されているとともに、教師側からは、デメリットよりもメリットの方が大きいという意見が多く、設置していない中学校の保護者からも設置要望が寄せられている。

また、小学校においても4校が独自で動き始めているとのことで、今後はさらにこの「F組」の取り組みが広がっていくと確信した。

残念だったのは夏休み期間のため、実際の学習状況が見られなかったこと。

《所 感》

在籍する学級に通えなくなった生徒にとって、適応指導教室に行くことは1段階落ちるという感覚で、その段差はとても大きいため、在籍学級に戻ることを難しくしているが、在籍学級と並列関係にあるという位置づけで多様性を認める「F組」ができてから校外にある適応指導教室、在籍学級、F組の3つを併用する生徒が増えて、自分の居場所を選びやすくしているので、登録利用の生徒だけでなく、ちょっと疲れたから3日間だけF組にいて、また在籍学級に戻るという使い方をする生徒も受け入れているため、不登校の未然防止につながっているとのことなので、小野市においても決して減っていない不登校対策として検討してもいいのではと思う。

【第2日】

愛知県半田市

人口 約11万8千人 面積 47.42Km² (令和2年 国勢調査)

《視察項目》

総合型地域スポーツクラブについて



《視察内容》

1995年に文部省（当時）が打ち出した「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」の指定を受け、総合型クラブの草分けとして知られる。

基本理念

- ①誰でもスポーツに親しめるように！
- ②いつでもスポーツに親しめるように！
- ③どこでもスポーツに親しめるように！
- ④いつまでもスポーツに親しめるように！

2002年に特定非営利活動法人（NPO）に認証され、「ソシオ成岩スポーツクラブ」と名称を改め、2003年には半田市による成岩地区総合型地域スポーツクラブハウス「NARAWA WING」に管理運営を委託している。

このクラブハウスは、学校地域共同利用施設であり、半田市立成岩中学校の体育館を兼ねているもので、メインアリーナに加え、スタジオ、テニスコートのほか、会議室やカフェスペースなど、充実した設備を備えている。

また、クラブ設立を機に成岩中では部活動を平日週3回に限定し、土・日曜日はソシオ成岩の活動として行うようになり、現在の運動部活動問題を見越したような先駆的なモデルとなった。⇒学校の週休2日制の導入に伴い、週末の子供たちの活動は家族、地域に戻していく。

その後、1998年から全市展開を開始、市内で残る4中学校区すべてで設立された。

1999年5月 スポーツクラブ YOUKI（亀崎中学校区）

2001年3月 青山スポーツクラブ（青山中学校区）

2001年5月 一般社団法人 乙川スポーツクラブ（乙川中学校区）

2003年2月 半田地区スポーツクラブ（半田中学校区）

※この取り組みは2013年に学校側の土・日の部活動再開によって、いったん後退し、現在は部活動以外の活動を幅広く行う形で部活動と共存しながら共同利用施設を拠点として総合型クラブを運営している。

《所 感》

今のところはスポーツクラブとしての成果はなく、あくまで学校単位になるが、半田市独自のスポーツ振興計画を策定して取り組まれており、教員の負担を減らすことや、地域と小中学生との関係が深まるなど、地域に密着したスポーツ振興がはかれたメリットは大きいと感じる。

現在、地域スポーツクラブについてアンケートを実施中で、令和5年度中には調査結果をもとに骨子をまとめて保護者に意思表示をすること。今後の取り組みに注目したい。

【第3日】

東京都町田市

人口 約43万1千人 面積71.55Km² (令和2年 国勢調査)

《視察項目》

バイオエネルギーセンターについて



《視察内容》

2022年1月に稼働開始した生ゴミのバイオガス化施設とゴミ焼却施設を一体的に整備した首都圏初の施設。

基本理念は「ゴミになるものを作らない・燃やさない・埋め立てない」を原則として、徹底したゴミの減量、資源化を進め、持続可能で環境負荷の少ない都市を目指す。

処理方法は、可燃ゴミを焼却した際に出る排ガスで水を加熱し、蒸気でタービンを回し発電。焼却灰は民間企業によりセメントやブロックに利用。

不燃ゴミは人力でリサイクルできるものを分けて民間企業へ、その他のものは焼却する。また、生ゴミは発酵させ、バイオガスを発生、燃焼させて発電機により発電する。

ゴミ処理に関する行政機関が入る「管理棟」は町田市が、ゴミ処理を行う「熱回収施設」、「不燃・粗大ゴミ処理施設」、「バイオガス化施設」は町田ハイトラスト株式会社が管理。

これは1982年に開設された「町田リサイクル文化センター」の施設老朽化に伴って老朽化したゴミ処理施設に代わり、首都圏初となる家庭ゴミバイオガス化施設を併設した新たな熱回収施設等（ゴミ焼却施設、バイオガス化施設、不燃・粗大ゴミ処理施設等）を2017年から市が整備していたもので、4年以上の工事を経て完成。（施工は株式会社タクマ）

一方、バイオエネルギーセンター施設正面の公営プール施設「町田市立室内プール」では、プール第1駐車場跡地に施設を増築する形で入浴施設を完備した「健康増進温浴施設」を2022年4月にオープン。同温浴施設は、バイオエネルギーセンターで発生する熱エネルギーを利用した温浴施設で、1階に駐車場、2階に男女浴場やサウナ、休憩スペース、3階に多目的室等を配置し、2階はプール棟と連絡通路で繋ぎ、両施設間を行き来できるようになっている。

《所 感》

環境配慮・廃棄物対策に関するキーワードである3R（Reduce：減らす Reuse：繰り返し使う Recycle：再資源化する）がピッタリとはまる、まさに最先端の施設だ。

ただ、こういった施設は建設するにあたっては用地を含めて地元とのコンセンサスが不可欠であるが、もともとあった施設の建て替えであることと、新施設として増設した用地が公団の所有地であったため、地元との協議が比較的円滑に進められたことで、実現したと思う。

小野市とは規模が違うが、新ごみ処理施設の建設に向けた協議の中においても選択肢の一つに考えられるのではないかと思う。

(町田市バイオエネルギーセンターと小野クリーンセンターの比較)

① 町田市バイオエネルギーセンター

稼働した今年1月から6月までの半年間の可燃ごみの処分量は、36,160 t

⇒約6,000 t/月（規格量＝7,740 t/月⇒30日/月として）

炉数は2炉で、 $129\text{t/日} \times 2 = 258\text{t/日}$

規格量より少ないのは、1炉を半年に1回の点検で20日間休炉したためと、資源化施設が建設途中なのでプラスチック類を収集していないこと。

また、町田市、八王子市、多摩市の一部事務組合で運営する施設もあり、町田市全域から収集していない。

② 小野クリーンセンター

令和3年度実績として、約31,000 tの可燃ごみを焼却している。

※バイオエネルギーセンターの年間焼却量は約72,000 tなので、約43%

令和 4年 8月 15日

小野市議会議長 岡嶋正昭様

総務文教常任委員会
藤原貴希

行政視察報告書

先般、実施しました総務文教常任委員会行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 令和 4年 8月 2日(火)～4日(木)

2 視察メンバー

委員長:喜始真吾 副委員長:藤原貴希
委員:小林千津子 藤原章 前田光教 河島泉
随 行:中村いづみ係長

3 視察先及び調査内容

- ① 愛知県岡崎市
校内フリースクール「F組」について
- ② 愛知県半田市
総合型地域スポーツクラブについて
- ③ 東京都町田市
バイオエネルギーセンターについて

4 調査結果

【第1日】

愛知県岡崎市

- ・人口:約 385,000 人(令和 2 年国勢調査)
- ・面積:387.20 km²

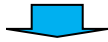
《視察項目》

『校内フリースクール「F組」について』

《視察内容》

1. F組設置の経緯

全国の動きと同様に岡崎市においても不登校児童生徒の増加が問題



教育長の理念「すべての子どもに光をあてる」



誰一人取り残すことなく個別最適化された学びの場を保障

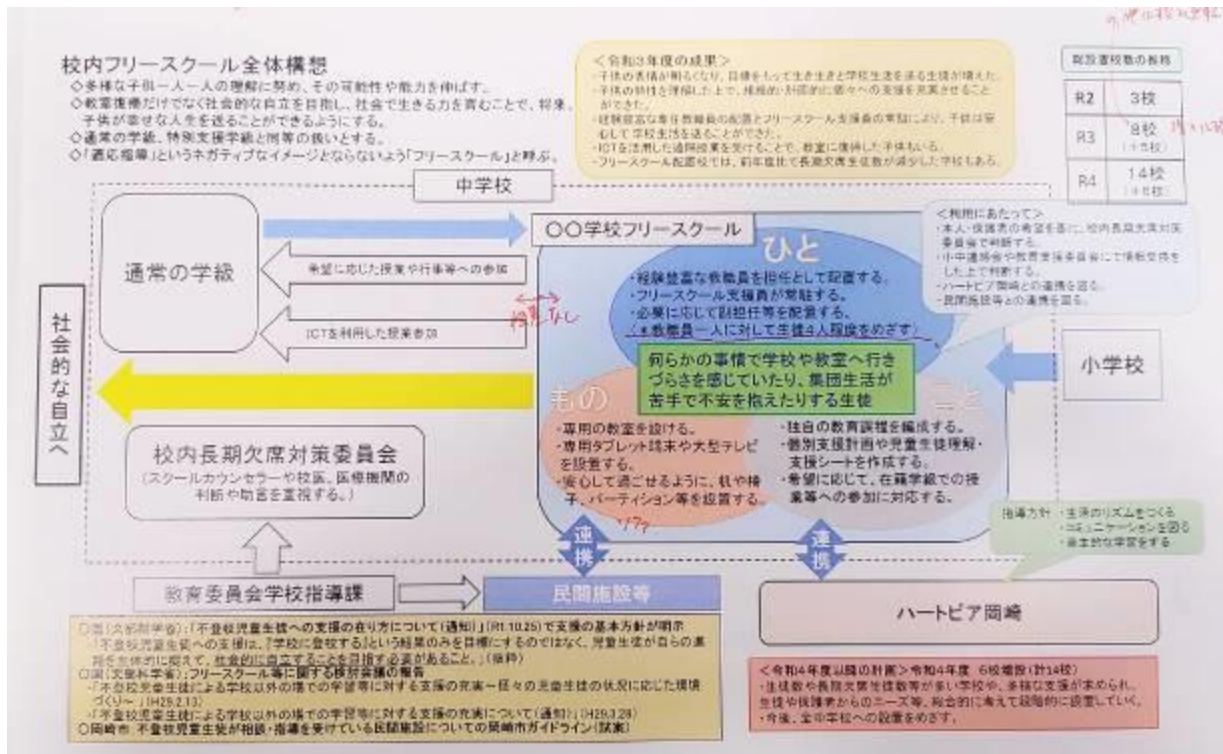
多様な教育機会を確保

子どもたちが社会的自立に向かえるように!

2. F組の理念

- ① 適応するのは子どもではなく学校である
⇒ 適応指導教室ではない
- ② 通常学級と同じ、1つの学級として扱う
⇒ 子どもや教職員の意識を変える
- ③ 多様性を受け入れられる担任
⇒ エース級の教員が担任
- ④ いつでも温かく迎える人がいる
⇒ 支援員を配置
- ⑤ 教室復帰ではなく社会的自立を目指す
⇒ 1日の取組を自分で考える

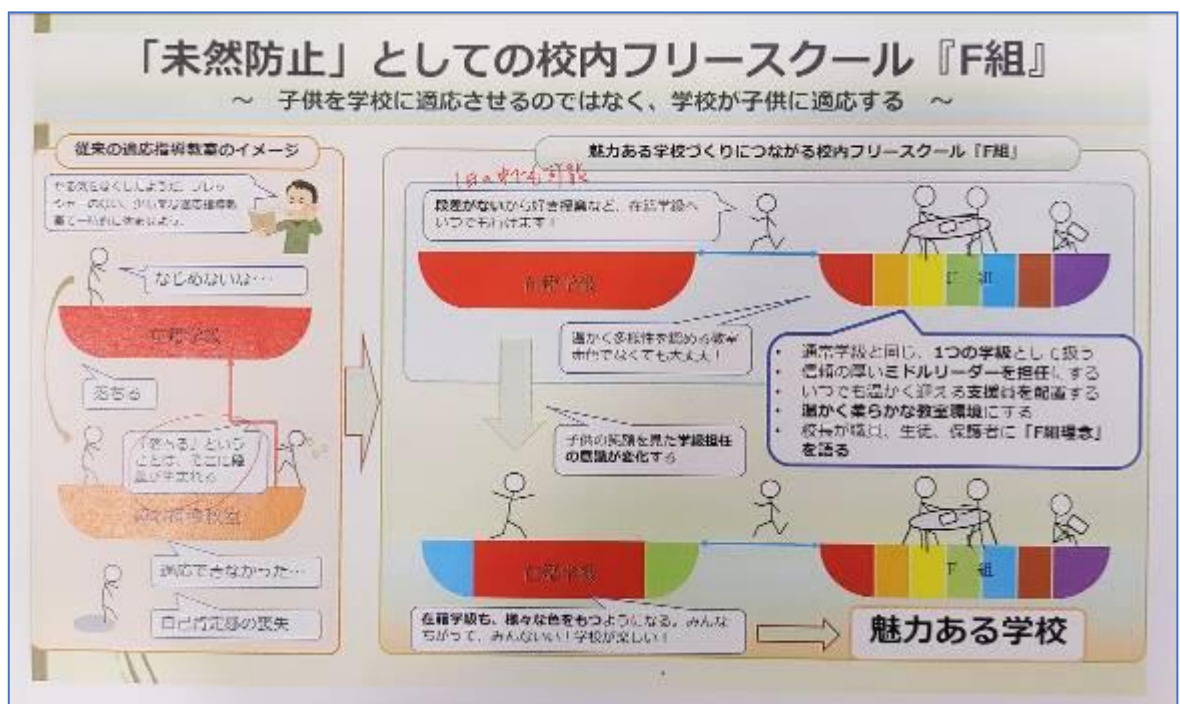
3. 全体構想



4. 設置状況

- 令和2年度 3中学校に設置
 - 令和3年度 新たに5中学校に設置
 - 令和4年度 新たに6中学校に設置
- *現在14校設置/市内中学校20校

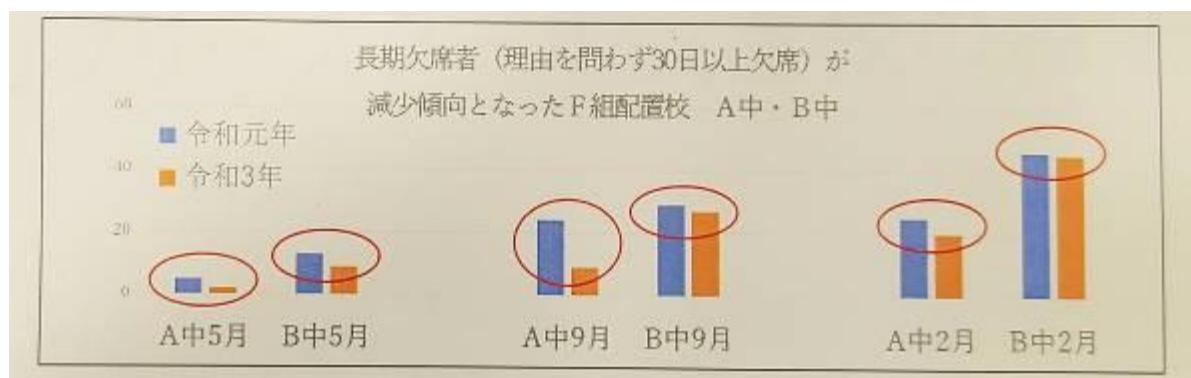
5. 「未然防止」のために



- ・1日のうちでもF組と在籍学級の行き来が可能
- ・F組と在籍学級の段差がない
- ・在籍学級も多様性をもつようになる

6. 成果

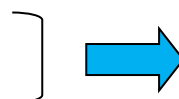
- ① 長期欠席児童生徒数の増加抑制
 - ・F組設置校の増加率 < F組未設置校の増加率
(もともと長期欠席生徒数の多い学校に設置しているにもかかわらず)
 - ・新設校5校中2校が減少傾向に!
- ② 教職員の意識の変化や深まりによる在籍学級の支援や指導の態勢の変化
- ③ 市の適応教室と在籍学級との段差軽減
(市の適応教室⇔F組⇔在籍学級を併用する生徒の増加)



7. F組の理念の浸透を通しての今後の目標

➤ すべての学級の改革を図る

- ① 多様性を受け入れる「居場所づくり」
- ② 多様性を受け入れる「絆づくり」



未然防止

《所感》

全国的に不登校児童生徒は増加傾向にあり、小野市においてもそれは例外ではない。そんな中、不登校児童生徒対策として注目されているのが校内フリースクールである。校内フリースクールの設置については横浜市や広島県などでも取り組まれており、それらの取組を参考にしたのが岡崎市の「F組」という取組である。目新しいから注目されているのではなく、実際に成果が現れている。岡崎市においては、もともと不登校児童生徒が多かった学校から設置していったのだが、現在その増加傾向は緩やかになり、学校によっては減少傾向に転じている。

F組の理念を掲げることで、まず教員の意識が変化し、「こうあるべき」「こうしなければならない」といった固定観念が弱まり、多様性を受け入れる心や環境が整ってきたのだろう。教員がそのような態度で子どもたちに接することで、子どもたちは自分という存在を認められている気持ちが芽生え、安心感をもてるようになり、教員との信頼関係が構築されてきたのだろうと推察する。環境整備に予算を充て、システムづくりに力を入れるあたりに岡崎市の本気度を感じる。

F組設置の本質は、不登校児童生徒を減らすということではなく、いろんな生きづらさや勉強のしづらさを持つ人がいるということ、いろんな考え方の人がいるのが世の中の常である（多様性がある）という事実を受け入れられる「心」を持つきっかけ作りにあるのだろうと考える。そして次に、多様性を受け入れ、互いを尊重する姿勢を学ぶのだろう。そういった考え方は教えられて身につくものではない。自らが経験して考え学ぶことで自然と身につくものである。私はこれこそが教育であり、こういった教育が世界中で必要であると強く思う。

【第2日】

愛知県半田市

- ・人口:約118,000人(令和2年国勢調査)
- ・面積:47.42 km²

《視察項目》

『総合型地域スポーツクラブについて』

《視察内容》

1. 半田市における総合型地域スポーツクラブ育成の取り組み

① 取り組みの経緯

平成6年度	成岩地区において学校と地域の自発的な取組としてのクラブづくりが始まる。(成岩スポーツタウン構想の発表)
平成7年度	成岩地区少年をまもる会が文部省指定「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」の推進母体となる。
平成8年3月	成岩スポーツクラブ設立(成岩中学校区)
平成10年度	全市展開を開始。 その核として半田スポーツ健康推進協議会(CLUB2000)を設置し、戦略プラン「HANDA Sports Life Project2000」を展開。 財源は文部省委嘱事業「子ども遊悠プラン」による。
平成11年5月	スポーツクラブ YOUKI 設立(亀崎中学校区)
平成13年3月	あおやまスポーツクラブ設立(青山中学校区)
平成13年5月	乙川スポーツクラブ設立(乙川中学校区)
平成15年2月	半田地区スポーツクラブ設立(半田中学校区) *市内5中学校区すべて設立される。
平成15年12月	ナラワウイング竣工

② 各スポーツクラブへの補助金交付額

(単位:千円)

	成岩	亀崎	青山	乙川	半田	合計
H7年度	6,000					6,000
H8年度	9,000					9,000
H9年度	12,000					12,000
成岩スポーツクラブの7~9年度の補助は文部省のモデル事業としてのもの						
H10年度	800	3,000				3,800
H11年度	800	3,000	1,500	1,500		6,800
H12年度	800	3,000	3,000	3,000		9,800
H13年度		800	3,000	3,000	3,000	9,800
H14年度		800	1,500	2,300	3,000	7,600
H15年度		800	800	800	3,000	5,400
H16年度			800	800	800	2,400
H17年度			800		800	1,600
H18年度					800	800
H19年度						0
合計	29,400	11,400	11,400	11,400	11,400	75,000

*市独自の補助金を概ね6年間交付

③ スポーツ振興計画における位置づけ

「第1次半田市スポーツ振興計画」における目標

- ・スポーツ実施率(週1回以上スポーツをする人の割合)の向上
高齢者の50%を含む、成人市民50%の達成
- ・総合型地域スポーツクラブへの加入率の向上
小中学生の60%以上を含む、市民加入率20%の達成

「第2次半田市スポーツ推進計画」(平成23年度~令和2年度)における目標

- ・スポーツ実施率(週1回以上スポーツをする人の割合)の向上
35.75% ⇒ 65.00% (平成29年度現在 47.43%)
- ・総合型地域スポーツクラブへの会員数の向上
9,744人 ⇒ 9,000人 (当初12,000人) (平成31年度現在 7,286人)

「第3次半田市スポーツ推進計画」(令和3年度~12年度)における目標

- ・スポーツ実施率(週1回以上スポーツをする人の割合)の向上
43.3% ⇒ 65.00%
- ・総合型地域スポーツクラブへの会員数の向上
7,487人 ⇒ 8,000人

2. 各スポーツクラブの状況

① 各スポーツクラブ

地区名	スポーツクラブ名	設立年月
成岩地区	NPO 法人 ソシオ成岩スポーツクラブ	平成 8 年 3 月
亀崎地区	スポーツクラブ YOUKI	平成 11 年 5 月
青山地区	青山スポーツクラブ	平成 13 年 3 月
乙川地区	一般社団法人 乙川スポーツクラブ	平成 13 年 5 月
半田地区	半田地区スポーツクラブ	平成 15 年 2 月

② 年会費

クラブ名	成岩	YOUKI	青山	乙川	半田地区
入会金	3,000 円	設定なし	設定なし	設定なし	設定なし
家族会員	24,000 円	設定なし	設定なし	設定なし	設定なし
一般	18,000 円	2,000 円	2,000 円	3,000 円	3,000 円
小中学生 未就学児	18,000 円	2,000 円	1,000 円 設定なし	2,000 円	中 2,000 円 小 1,000 円

*成岩以外のクラブはチームに所属するための参加費が別途必要

*成岩の小中学生は保護者と加入(親子会員)

③ スポーツクラブ加入者数(市内合計)

(単位:人)

	H31.2	R2.2	R3.2	R4.2
全会員	7,286	7,487	6,928	7,349
小学生会員	2,298	2,368	2,000	2,050
中学生会員	1,190	1,228	1,263	1,334
一般会員	3,798	3,891	3,665	3,965

・地区により増減に差がある

・全体としては横ばいか、やや増加傾向にある

3. 総合型地域スポーツクラブの活動支援

① 学校体育施設の開放

- ・運動場夜間照明施設とプールは、一般の団体にも利用されている
- ・その他の学校体育施設は、総合型地域スポーツクラブの利用を優先

② 総合型地域スポーツクラブ連携事業

- ・市から委託を受けたスポーツ教室、ボランティア指導者の研修、合同会議による情報交換を行っている

例) 親子のスポーツ教室、高齢者かんたん体操教室、シニアのためのスポーツ教室、アスリート育成教室、スポーツアシスタント養成研修会など

③ 地域認定スポーツアシスタント

・総合型地域スポーツクラブで指導にあたる人たちに、半田市独自の指導者認定資格である「地域スポーツアシスタント」という資格を付与



指導者の資質向上のためのトレーニングの場を提供することを目的として

⇒地域認定スポーツアシスタントは、市内の社会体育施設を個人利用に限り減免

*資格取得条件

1. 各総合型地域スポーツクラブにおいて指導者登録をして、実際に指導者として活動
2. 所属する総合型地域スポーツクラブを通して受講を申し込み
3. 3年で更新講習を受講

	成岩	YOUKI	青山	乙川	半田	合計
認定者数	49人	24人	38人	104人	84人	299人

令和4年4月1日現在

4. ソシオ成岩スポーツクラブ

「学校の部活動から街のブカツへ」

地域の子どもたちを地域ぐるみで育てる!

① 特徴

・ソシオ(協賛会員)が支えるクラブ運営

⇒地域住民の13%にあたる約2,900名のソシオが持ち寄る協賛会費が財政基盤

・全ての子どもたちの活動機会を保障する制度

⇒要保護・準要保護家庭に対する会費の全額扶助

・中学校部活動にない種目も実施

⇒陸上、硬式テニス、チアリーディング、ホッケー

・アスリートによる質の高いプログラムの実施

・生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現

⇒クラブで育った子どもたちが大人になり、ソシオとして戻ってくるという循環

・地域課題の解決を目的として、子育て支援や子どもたちのキャリア教育に関する取組

② 現況(2021年度末)

・財政規模:7,715万円(2021年度決算)

協賛会費収入等1,933万円、事業収入4,305万円、その他収入246万円
前期繰越金1,231万円

・正会員:10名

・役員:理事3名(非常勤)、監事1名

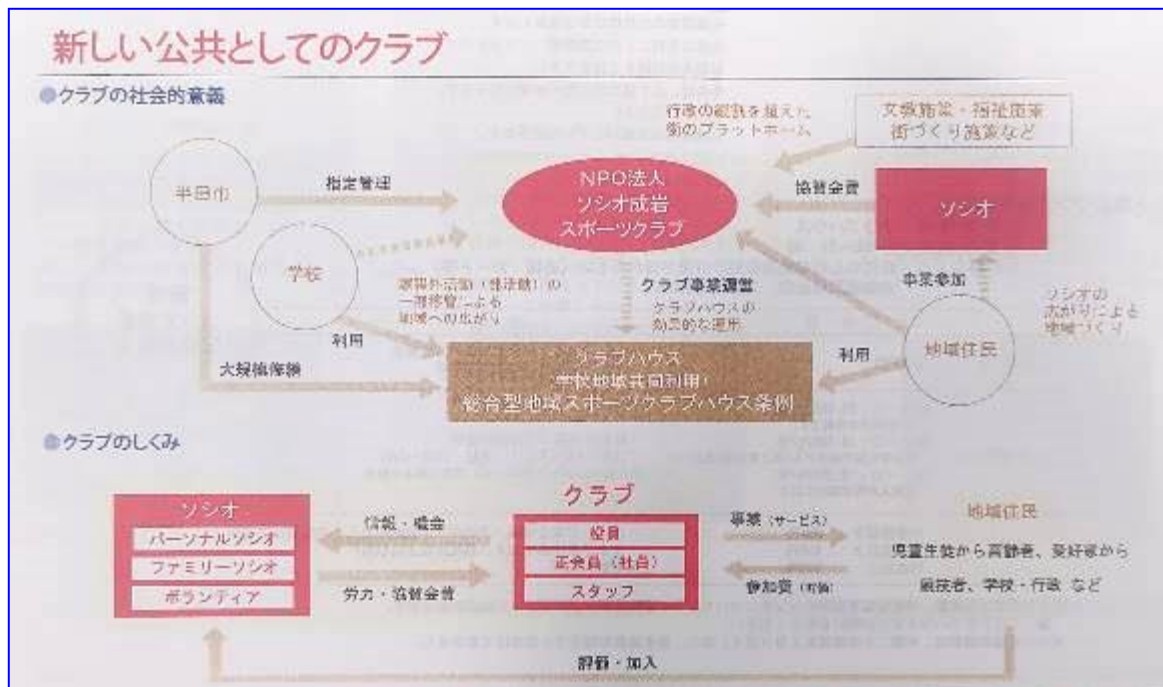
・常勤職員:5名

・パート/アルバイト:9名

・契約スタッフ:15名(スポーツ指導者)

・ボランティア:53名

③ スポーツクラブのしくみ



④ 事業

・街のブカツ支援事業

・トレーニングアカデミー事業(トップレベルスポーツとの連携)

・教育・子育て支援事業

・クラブハウス運営事業(指定管理者として)

⑤ 内部の様子

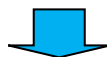


5. 総合型地域スポーツクラブと小中学校部活動について

平成14年3月

原則、部活動は土日祝日には行わない

中学生がスポーツをする場合は地域のスポーツクラブで活動することにした。



様々な問題が発生

- ・地域指導者の確保難しい。実際は教員が土日祝日に指導していた。
- ・会費から指導者への謝金を支払うのが困難。
- ・土日祝日に部活動として試合に参加することが多かった。
- ・部活動であれば無料であるが、スポーツクラブに会費を払う理解を得るのが難しかった。



課題解決を図るための方向性を検討



平成 24 年 4 月 1 日

祝日も含め、学校長の判断によって部活動として実施することができることとする。

*現在スポーツクラブに加入しているのは 1 中学校のみ (5 中学校中)。

《所 感》

半田市の総合型地域スポーツクラブは 5 つあるが、担当者に伺ったところ運営がうまくいっているところは 2 つであるとの回答を受けた。中学校区での人口の問題や施設、環境の問題もあり、総合型地域スポーツクラブの運営は大変難しいという印象を受けた。その中でソシオ成岩スポーツクラブは運営が非常にうまくいっている施設のひとつであった。その要因としては「①多世代・多種目・他志向 ②住民の参画 ③事業体としての自主経営」という理念のもと、ヒト(指導者、利用者、協賛会員)、モノ(充実した施設)、コト(実施事業)がうまく関わり合い循環していることである。その結果財政的にも黒字を維持されている。

半田市において、一度はチャレンジして一旦振り出しに戻った部活動の土日祝日の地域移行であるが、前ははまだシステムが整っておらず、また社会的にも部活動の地域移行の必要性が議論されていなかった。今回の地域移行へのチャレンジは、ハード、ソフトが整っているソシオ成岩スポーツクラブにおいてはスムーズに移行できるのではないかと考えた。ただし、これはソシオ成岩スポーツクラブという 1 中学校区のスポーツクラブにおいてのみの話である。

小野市に目を移してみると、河合中学校区においては 1 小学校 1 中学校であるため、地域スポーツクラブは部活動の受け皿にはなり得ない。小野市においては中学校区ではなく、市全体を 1 スポーツクラブとして捉え受け皿を作っていく必要があるのではないかと考える。

部活動の地域移行は国の方針にあるように喫緊の課題である。課題の観点としては、①教員の働き方改革、②子どもたちの放課後活動(スポーツ、文化活動)の多様性の確保にある。しかし、放課後活動の主役は子どもたちである。未来ある子どもたちの活動の可能性をできるだけ確保するべく環境を整えるのが行政の仕事であると私は考える。

【第 3 日】

東京都町田市

・人口:約 431,000 人(令和 2 年国勢調査)

・面積:71.55 km²

《視察項目》

『バイオエネルギーセンターについて』

《視察内容》

1. 町田市のゴミに対する理念

「ゴミになるものを作らない
燃やさない
埋め立てない」

2. 施設概要

- ・敷地面積 : 約 77,000 m²
- ・階数/高さ: 工場棟 地下 2 階、地上 5 階、高さ約 28m
煙突 高さ 100m
管理棟 地上 4 階 高さ約 20m
- ・施設規模 : 熱回収施設 (焼却施設) ストーカ式焼却炉 258 トン/日 (129 トン/2 炉)
バイオガス化施設 乾式高温メタン発酵 50 トン/日
不燃・粗大ごみ処理施設 機械選別・手選別 47 トン/5h
- ・設計・施工: 株式会社タクマ
- ・運営 : 町田ハイトラスト株式会社

- ① 管理棟
- ② 不燃・粗大ごみ処理施設
- ③ 熱回収施設
- ④ バイオガス化施設



① 管理棟

- ・会議室（イントロダクション映像）
- ・工場模型
- ・ごみと暮らしの歩み

② 不燃・粗大ごみ処理施設



・人の手による手選別

1. 磁力選別機による鉄の取り出し ⇒ 2. アルミ選別機によるアルミの取り出し
⇒ 3. アルミ選別後さらに人の手により非鉄金属の選別
⇒ 4. 残渣は熱回収施設へ

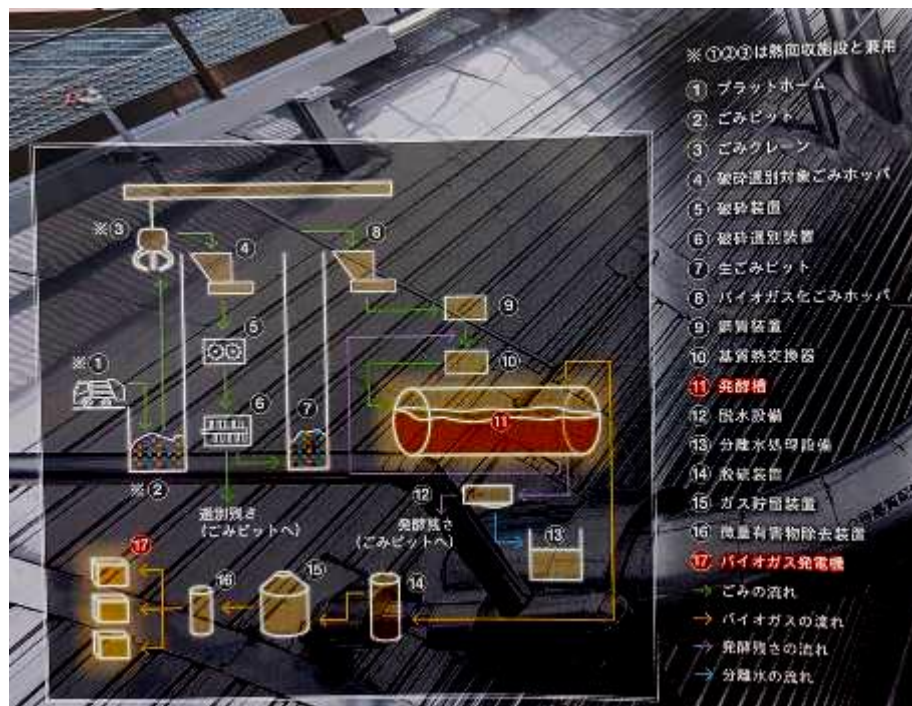
* 小型家電は引き取り業者へ（内部の貴金属は業者で回収）

③ 熱回収施設



- ・排ガス:法令基準よりさらに厳しい独自の基準を設定
- ・高温の排ガスで水を温め蒸気をつくり蒸気タービンを回し発電
⇒施設内で使いきれなかった電気は売電
⇒一日最大発電量約 15 万kWh (約 14,000 世帯/日分)
- ・発電で使った蒸気:冷やして再利用 (一部は市立プールへ)

④ バイオガス化施設



- ・生ごみを発酵槽にて 20 日間発酵させバイオガスを発生
- ・バイオガス発電機でバイオガスを燃やしエンジンを動かして発電
- ・発酵残渣は脱水装置で水分を絞ったのち焼却
- ・脱水処理したろ液は微生物によりきれいにし再利用、一部は下水道へ放流

⑤ 発電

- ・蒸気タービン発電
- ・バイオガス発電
- ・太陽光発電
- ・水力発電

*令和 3 年度決算によると電力販売収益は 34,372,815 円

《所感》

町田市のバイオエネルギーセンターは建設費用に約 300 億円をかけた施設であり、広大な土地に建つ巨大なセンターの存在感は圧倒的だった。土地については公団が所有していた土地を市が買収し前のクリーンセンターを建てた経緯があり、今回バイオエネルギーセンターの建設に際し土地買収の問題はなかったが、地元住民の理解を得ることは必要であり、地元住民を含めた検討委員会を立ち上げセンターの建設に至っている。小野市を含む一部事務組合においても建設地となる地元住民の合意は不可欠であり、受け入れゴミの種類や処理方法、発電やそれを利用した施設などの規模を考えると現在のクリーンセンターよりも広い用地が必要であるため、慎重に話を進めていく必要がある。

町田市との規模は違うが、「ゴミになるものを作らない、燃やさない、埋め立てない」という理念は SDGs との整合性があり、またバイオエネルギーセンターは、熱の再利用、不燃ごみの分別、バイオガスによる発電等、「3R」を具現化した施設であり、今後のごみ処理施設はこのようにごみの処理(クリーン)だけにとどまらず、熱やガス、水など再利用できるものは全て再利用し、環境に対してクリーン(清潔)な施設となるべきであると考え。

令和 4年 8月18日

小野市議会議長 岡嶋 正昭 様

総務文教常任委員会
河 島 泉

行政視察報告書

先般、実施しました総務文教常任委員会行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 令和4年8月2日（火）～令和4年8月4日（木）

2 視察メンバー

喜始 真吾（委員長）、藤原 貴希（副委員長）、
河島 泉、前田 光教、藤原 章、小林 千津子、（随行者）中村 いづみ

3 視察先及び調査内容

（1）愛知県岡崎市

人口：約38万5千人、面積：387.20 Km²（令和2年国勢調査）
校内フリースクール（F組）について

（2）愛知県半田市

人口：約11万8千人、面積：47.42 Km²（令和2年国勢調査）
総合型地域スポーツクラブについて

（3）東京都町田市

人口：約43万1千人、面積：71.55 Km²（令和2年国勢調査）
バイオエネルギーセンターについて

4 調査結果

【第1日目】

愛知県岡崎市

人口：約38万5千人、面積：387.20K㎡（令和2年国勢調査）

《視察項目》

校内フリースクール（F組）について

全国的に増加が問題となっている不登校児童の社会的自立に向けて教育委員会が主導となって進められている校内フリースクールの視察と、研修を実施。

歴史ある岡崎市議会議場の見学について

歴史ある岡崎市議会の議場見学と経過、計画の説明を受ける。

《視察内容》

全国的に不登校児童生徒の増加が問題とされており、岡崎市でも大きな課題とされる中で、教育長の「すべての子どもに光をあてる」の教育理念により、誰一人取り残すことなく学びの場を保障し、生徒が社会的自立に向かって歩き出すことができるようにしたい。との思いから、令和2年度3中学校より教育委員会主導でスタート。

令和4年度には6校増設の予定で、全20校のうち7割に当たる14校で設置が進められ、今後全中学校への設置をめざしている。

F組の理念として、通常学級と同じ1つの学級として扱い、エース級の教員が担任となって、子どもや教職員の意識を変えることや、教室復帰ではなく社会的自立を目指している。

F組にいることでの劣等感（負い目）はなく、文化祭等にもF組として出場している。

また、元々の配員されたクラスがあり、通常学級の生徒たちにも、F組の生徒たちの苦しさは理解できるので、偏見もないと思うとのこと。

今後、小学校のフリースクール設置についての質問に対し、将来的には大規模校として作りたいとは考えているが、現状は、校長先生独自でやっているもので、すぐには難しい。とのこと。

《所感》

F組を未設置の学校の保護者からも、設置して欲しいとの声が上がっており、また、エース級の担任を据えているためか、担任からは「教育を考え直すことができた」「子ども達の成長が感じられて楽しい」との感想も伺えた。

小野市でも課題は山積していることとは思うが、何とか子どもの社会的自立に向けて取り組んで行って欲しいと思った。

F組についての説明を受けた後、岡崎市議場の見学をさせていただいた。随分歴史のある議場であったが丁寧に使用されており、今後も補修しながら利用していく予定との

ことだった。

岡崎市議場は重厚で時間の経過を感じさせない素晴らしい建物で町全体の雰囲気と上手く調和しており素晴らしい建物であった。



【第2日目】

愛知県半田市

人口：約11万8千人、面積：47.42Km²（令和2年国勢調査）

《視察項目》

総合型地域スポーツクラブについて

1995年「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」の指定を受け、全国の総合型スポーツクラブの草分けとなった、半田市の「成岩スポーツタウン構想」の実態と説明を受ける目的で、見学と研修に訪問することとした。

《視察内容》

1995年「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」の指定を受け、「成岩スポーツタウン構想」を提唱。総合型クラブの草分けとなった。

1996年学校の週末の部活動休止の受け皿として土日の活動を希望する子どもたちのためにクラブ設立。

2002年法人化、2003年成岩中学校の空き教室に、クラブハウス設立。

2003年12月地域の要望により、中学校体育館の建て替えに際し、学校と地域との共同利用を前提としたクラブハウス（社会体育施設）を半田市が整備。

新しい部活動のあり方として、地域・学校・行政が連携し又、多世代にわたる住民スポーツサービスの充実もはかることができる。また、クラブ運営については、地域住民13%の約2,900名の協賛会員と53名のボランティアアシスタントが支え、小中学校の多様なニーズに応える取組も実施されていた。

《所 感》

生涯にわたるスポーツライフの実現や、地域の子育て支援や子どもたちのキャリア教育に関する取組など、クラブの社会的地位の向上も考えられており、全国的に苦慮されている部活動の教員の負担減、小中学生のレベルに応じた指導や活動、地域と小中学生との関わり等、多くの解決がされており素晴らしいと思う。

小野市においても、生徒数の減、教員の負担軽減、地域住民の交流等考えたとき、この様な取組も有効な手だてとして考えてみる余地はあるように思った。



【第3日目】

東京都町田市

人口：約43万1千人、面積：71.55 Km²（令和2年国勢調査）

《視察項目》

バイオエネルギーセンターについて

小野市において今後、クリーンセンターの新設の計画がある為2022年1月に稼働開始した先進的バイオエネルギーセンターを有する東京都町田市のバイオエネルギー

《視察内容》

2022年1月に稼働開始したばかりの随所に様々な工夫をされた素晴らしい施設であった。

「バイオエネルギーセンター」との名称であるだけに細かいところまで配慮されていると感心した。

燃やせるごみを、まず一定の大きさに破碎。処理効率を高めた燃やせるごみをさらに細かくしてメタン発酵に適した生ごみを取り出し、有機性ごみを選別し微生物により発酵処理、発生したバイオガスを利用しての発電、同時に発生した熱も有効利用し、排ガスは集塵装置2基を使って有害物質を取り除いて大気に放出。

焼却により発生した灰は、エコセメントとして利用するため、貯めて施設へ搬送。発電で使用した蒸気は、再度水にして利用。また、一部の蒸気は、隣接する室内プールへ送って利用している。

不燃・粗大ごみは、資源になるものを手作業で選別。少しでも再利用できる物は、有効利用できるように工夫されている。不燃粗大ごみも細かく砕き鉄などの資源選別がしやすいように工夫されている。アルミも同様に有効利用されている。

《所 感》

小野市においても、今後クリーンセンターの新設を予定しており、町田市の生ごみのバイオマス化施設と、ごみ焼却施設を一体化整備された当施設は、今後の展望に向けて大変参考になった。

行政機関が入る管理棟と、ごみ処理を行う施設管理民間会社との競合施設の運営も、今後の課題として参考になった。

またバイオエネルギー施設正面の公営室内プールのみならず、温浴施設も併設されており、これにより焼却エネルギーの幅広い分野での活用も考えられるのではとの今後の取り組み方法の広がりも感じられた。

町田市は小野市と違い規模も大きく、小野市に全部当てはめることは難しいことと思われるが、今後の課題として「コンパクトシティおの」の特色を出せる方向で、今回の視察研修を柔軟な発想で考えていく良い機会となった。



令和4年8月18日

小野市議会議長
岡嶋正昭様

総務文教常任委員会
前田光教

総務文教常任委員会行政視察報告書

先般、実施しました総務文教常任委員会行政視察の結果について、
下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日

令和4年8月2日（火）～ 令和4年8月4日（木）

2 視察実施研修議員（総務文教常任委員会）

喜始真吾（委員長） 藤原貴希（副委員長） 河島泉 藤原章
小林千津子 前田光教 中村いづみ（事務局係長）



3 視察先及び調査内容

愛知県岡崎市	「校内フリースクール（F組）について」
愛知県半田市	「総合型地域スポーツクラブについて」
東京都町田市	「バイオエネルギーセンターについて」

4-1 調査結果

[第1日目] 愛知県岡崎市

●岡崎市の概要

人口 384,654人（令和2年国勢調査） 面積 387.20km²

人口密度 993.4人/km²

財政力指数 1.04 将来負担比率 ー.ー%（令和2年度）

議員定数（条例）37人 現員数37人（令和3年11月10日）

《視察項目》 校内フリースクール（F組）について

●校内フリースクールの設置で長期欠席者の増加を抑制

～ Fit、Free、Fun、Future の頭文字を取った「F組」 ～

愛知県岡崎市が、長期欠席者や集団になじめない子などに個別最適な学びの場を保障し、多様な教育機会を確保するために校内フリースクール「F組」を設置した。

県教育委員会主導で校内フリースクールの設置を広げる広島県の取り組みなども参考に、2020年度に3校でスタートし、21年度に5校増設、22年度には6校が加わり計14校に設置した。（市内中学校全20校）

21年度時点で非設置の12校も、不登校生がいない1校を除いて残り11校はすべて設置を希望した。予算の関係で22年度の新規設置は6校に絞られたが、選外となった5校では保護者からもF組の設置を望む声が多く上がり、23年度には市内全中学校にF組を整備する予定となっている。

○岡崎市教育委員会教育相談センター所長談

「増設が続くのは、やはり成果が出ているからだ。F組設置校は非設置校に比べ、長期欠席者の増加率が抑制されており、21年度新設校5校のうち2校は19年度に比べ長期欠席者が減少傾向にある。また、市の適応指導教室と在籍学級との段差軽減にも繋がっている。」と説明があった。

また、「在籍学級に通えなくなった子にとって、適応指導教室に行くことは1段階『落ちる』感覚があり、その段差はとても大きく、在籍学級に戻ることを難しくしている。在籍学級と並列関係にあるという位置づけで多様性を認めるF組ができてから、校外にある市の適応指導教室、在籍学級、F組の3つを併用する生徒が増えた。自分の居場所を選びやすくなったのではないかと思う。」

登録利用の生徒だけでなく、ちょっと疲れたから3日間だけF組に行っ、また在籍学級に戻るという使い方をする生徒も受け入れる。F組と在籍学級を気軽に行き来できることが、不登校の未然防止にもつながっている。

そんなF組の様子や支援・指導のあり方を目の当たりにした教員の意識が変わり、在籍学級の支援や指導の態勢も変化してきているとのことである。市内ではF組を参考に、独自に校内の居場所づくりを始める公立小学校も増えているという。

○F組の理念（特に1と2の理念の浸透し成果を生んでいる）

- 1) 適応するのは生徒ではなく学校。学校に適応できるようにする適応指導教室ではない
- 2) 通常学級と同じ、1つの学級として扱う
- 3) 多様性を受け入れられる、校内でも信頼の厚いエース級の教員を担任に置く
- 4) いつでも生徒たちを温かく迎える支援員を配置（市の予算で採用）
- 5) 教室復帰ではなく社会的自立を目指す

○「環境」の改革で「ヒト・モノ・コト」の環境整備

1)「ヒト」の改革

エース級の担任と支援員を中心とした支援体制の構築、支援員は元教員や元教員補助者など、子どもの理解に努め援助できる人材を市の予算で採用している。

(F組の担任は定数配置の教員が受け持っており、加配はされていない。)

F組の担任が活動や学習のコーディネーターで、支援員がファシリテーター、そのほかの教員はエスコートランナー。そして随時、スクールカウンセラーや養護教諭がサポートに入る。「少予算かつ少人員をこうした『チーム学校』の力でカバーし、F組という温かい居場所づくりをしている。

2)「モノ」の改革

F組を新設する学校は初年度に約30万円を支給し、生徒がリラックスして過ごせる空間づくりのための予算として執行する。談話用のテーブルやパーティションなどを活用して教室づくりを工夫する。活動を充実させるアイテムとして、カードゲームや電子ピアノ、UVレジン、生き物などもそろえている。

ひょうたん形のテーブルでコミュニケーションを促進、1人の時間を必要とする生徒もいるのでパーティションで個室空間を、靴を脱いでくつろげる空間で談話やゲーム、電子ピアノも置き、教室そのものも、通常学級と同じように開設する。堂々としてここへ来ていいのだという雰囲気づくりが大事だと実感できる。

3)「コト」の改革

個を大切にした教育課程や個別支援計画によるサポートだ。例えば、基本的には1日の取り組みや時間割は生徒自身が決める。こうした毎日の自己決定や、社会的自立につながるような機会により、生徒たちの自己肯定感は育まれている。

○課題は理念の浸透 — すべての学級に多様性を —

いくら環境を整備しても、在籍学級との段差意識は簡単にはなくならず、「みんなが受ける授業を受けずに楽をしている」、アイスブレイクの一環として行うゲームを「遊んでばかりいる」と捉える教員、生徒、保護者は少なからずいる。そのため、「人の心」の改革にも取り組み、本人、職員、周囲(生徒、保護者、地域)の意識を変えろということだが、特に大切なのが「校長による理念の浸透」だと話されていました。

5-1 所感

岡崎市のF組設置は、単に不登校児等の対応のみではなく、学校経営に向けた取り組みとして感じられました。

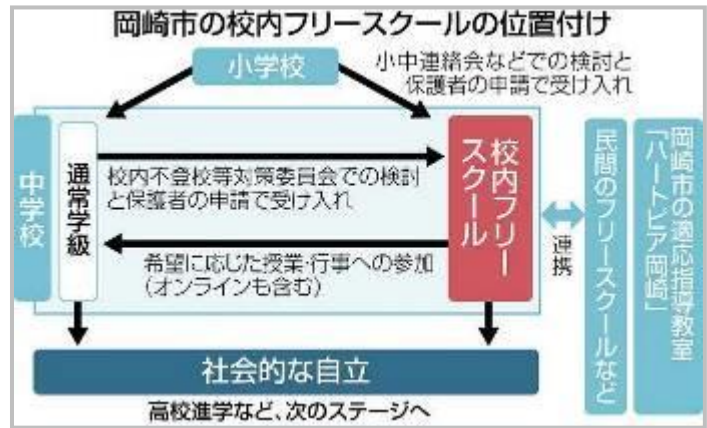
また、岡崎市教育委員会ではF組の5つの理念を共有し、戦略的実践は各校に任せ、可能とする範囲での創造性をもってチャレンジしているものと感じました。

さて、私感ではありますが、現代社会では個を大切にすることは認知されています。一方では、集団・団体行動の大切さも問われているのも事実であり、それら双方を体験し、また、体得した者が生き抜く力を抱くものと思っています。義務教育過程では、それらをどれだけ

体験できるかが将来に繋がるものと思っています。

そこで、岡崎市を参考に小野市での校内のフリースクールを考えると、確かに何らかの効果もあると思いますが、根本的に児童数の相違、小野市内の小規模校においては各クラスがフリースクールとしての機能も果たしている部分も考えられます。

それらを考慮し、現実を見極め、現場との議論、将来を見据えた教育、どうすることが小野市の児童生徒の未来に繋がるのか、今後も教育機関と共に考えていきたいものです。



余談ですが、小野市の取り組む「夢と希望の教育」、単に学校教育、学校任せではなく、教育現場と地域社会が一体となって児童生徒を育てることが重要であると感じている旨を記し、今回の視察の所感とします。

4-2 調査結果

[第2日目] 愛知県半田市

●半田市の概要

人口 117,884人 (令和2年国勢調査) 面積 47.42km²

人口密度約 2485.9人/km²

財政力指数 0.98 将来負担比率 ー.ー% (令和2年度)

議員定数 (条例) 22人 現員数 21 (令和4年6月30日)

《視察項目》 総合型地域スポーツクラブについて

●愛知県総合型地域スポーツクラブとは

地域住民が主体的に運営するクラブであり、子どもから高齢者まで、さまざまな人々がいつでも活動できるという特徴を持っている。地域の学校等を活用し、幅広い層の地域住民の協力を得て活動することで、誰でも気軽にスポーツを楽しむことができる。

また、会員が自ら会費を持ち寄って活動することにより、地域のクラブとして愛着をもって育てることができ、スポーツ活動だけでなく、地域のイベントなども行うことによって、より地域に密着したクラブ作りが可能となっている。

●半田市のクラブ事例「NPO法人ソシオ成岩（ならわ）スポーツクラブ

～ ソシオが支える豊かなスポーツ環境 ～

1996年3月のクラブの設立以来、2002年12月の法人化、2003年12月の拠点クラブハウスの獲得、夢の実現に向けて歩んでいる。

ソシオとは、「仲間・つながり・社会」という意味で、スポーツを「する」仲間たちが集い、それがやがてスポーツを「支える」役割を果たし、その支えに拠って非営利法人が公益的な事業を広く市民に提供する。それが、総合型地域スポーツクラブのあり方であり、また地域づくりに貢献する総合型地域スポーツクラブのあり方である。こうしたクラブこそ、子どもたちを育む豊かなスポーツ環境だと・・・。

(特定非営利活動法人ソシオ成岩スポーツクラブ 理事長談)

(1) 街の部活動支援事業

未就学児及び小中学生を対象としたスポーツスクールと、小学生を対象とした平日放課後のプレイスクール、多世代を対象としたスポーツサークルを年間通して運営し、生涯スポーツの環境づくりや文化活動の推進を図る。

(2) 教育・子育て支援事業

小学生を対象に子育て支援の一貫として、子ども達の勉強に取り組む姿勢の構築を目的とした学習支援や、スポーツ・レクリエーションを通じた異世代交流の機会の提供を行う。また、主に中学生を対象に、キャリア形成に必要な能力育成につながる機会の提供を行う。

(3) トレーニングアカデミー支援事業

地域住民の健康づくり、子どもを対象とした自然体験プログラム、及びスポーツ・文化振興のための各種プログラム、イベントを実施する。トップアスリート養成を目的としたプログラムを実施する。

(4) クラブハウス運営支援事業

半田市からの指定管理を受け、成岩地区総合型地域スポーツクラブハウスを当法人のクラブハウスとして運営する。

(5) 広報・奨励事業

法人の醸成した基金の運用や扶助制度を通して、経済的に恵まれない家庭の子どもたちの活動や、志を支援する。

(6) 総合型クラブ研究開発センター事業

文科省（スポーツ庁）スポーツ振興基本計画にある総合型地域スポーツクラブのあり方について研究開発し、必要に応じて関係機関と連携して全国に発信する。また、行政からの委託事業などを実施する。

5-2 所感

半田市役所で説明を頂き、何となく存在感を感じるリーダーの存在を予測しました。そして、現場である成岩スポーツクラブに伺い納得に至りました。

さて、兵庫県でも「スポーツクラブ21ひょうご」の取り組みを行い、小野市においても7クラブが設立され、各クラブにおいて様々な取組みをされ現在に至っています。小野市の現状を理解し今回の視察に出向いたのですが、視察先との違いを見てみると、半田市では自主運営(会費運営)等を考慮して、1クラブの対象人口を3万人とか4万人と想定しており、また、学校や地域との連携も図られていました。

小野市とは各クラブの規模等も大きく異なりがあり、結果として、その地域(市)にあった存在で良いとは思っています。小野市におけるスポーツクラブのあり方について、現在は自主運営の形態となっていますが、地域づくり協議会や学校運営等とも連携し、地域コミュニティを図って頂きたいと思うところです。

4-3 調査結果

[第3日目] 東京都町田市

●町田市の概要

人口 431,079人(令和2年国勢調査) 面積 71.55km²

人口密度約 6024.8人/km²

財政力指数 0.97 将来負担比率 一.一%(令和2年度)

議員定数(条例) 36人 現員数36人(令和4年3月9日)

《視察項目》 バイオエネルギーセンターについて

町田市バイオエネルギーセンターは、2022年1月に稼働開始し、生ごみのバイオガス化施設とごみ焼却施設を一体的に整備した首都圏初の施設である。

ごみ処理に関する行政機関が入る「管理棟」は町田市が、ごみ処理を行う「熱回収施設」、「不燃・粗大ごみ処理施設」、「バイオガス化施設」は特定目的会社(TMK)である「町田ハイトラスト株式会社」が管理している。

○町田市バイオエネルギーセンター施設概要

所在地 東京都町田市下小山田町3160番地

敷地面積 約77,000m²

延床面積 工場棟 約17,000m² 管理棟 約5,200m²

建物 工場棟 地下2階 地上5階建て 高さ約28m 煙突高100m

管理棟 地上3階建て 高さ約20m

施設規模	熱回収施設（焼却施設） ストーカ式焼却炉 258 t／日（129 t／日×2 炉） バイオガス化施設 乾式高温メタン発酵 50 t／日 不燃・粗大ごみ処理施設 機械選別・手選別 47 t／5 h
------	--

首都圏初導入のバイオガス化施設は、生ゴミの発酵で発生したメタンガスを利用して発電し、焼却施設の蒸気タービン発電と合わせて、施設の電力消費を賄うとともに、余剰電力を鶴見川クリーンセンターや売電、災害時の電力供給にも利用し、ゴミの有効利用で二酸化炭素削減にも寄与している。

施設内には、ゴミ処理の工程を見られる通路を設定、解説パネルやクイズ形式のアトラクション、体験型学習などを取り入れた展示コーナーを設けている。管理等には環境学習やワークショップ、市民活動に利用できる会議室やテラス、リサイクルショップも設置している。

また、処分場上部を活用したスポーツ施設、旧焼却施設跡地の緑地広場、町田市立室内プール内の温浴施設も整備されている。

地元町内会では、反対の声も多かったが、従来よりも良い施設になって環境が改善されるという期待から、建て替えを受け入れたということである。

5-3 所感

現代のゴミ処理における考え方として、3R（Reduce・Reuse・Recycle）は必然とされ、加えて、それら施設の有効利用、そして進化してバイオエネルギーの供出等、環境への理想は高くなっています。

一方では、ゴミ処理施設は一種の迷惑施設として考えられる部分があり、各自治体（広域組合等）において試行錯誤を重ね、住民理解を求め、施設の設置に至っている現状があり、単に環境整備だけでは事足りない施設としても考えられています。

町田市においては、自治体所有地での建て替えとなり、一部、住民からの反対もあったようですが、従来よりも良い施設となり環境が改善されるという期待から、建て替えを受け入れたとのことでした。

小野市においては、今後クリーンセンターの新設に向け、検討と議論が必要となり、加東市、加西市との連携を図りながら、今回の視察を活かしたいと思います。

余談ですが、3Rに関連する「かるた」を児童が作成し、それらを商品化しており、その取り組みに関心を持った次第です。



3Rかるた

総合所感

2年ぶりの行政視察に出向くこととなりましたが、7月中旬よりコロナ感染症が拡大し、第7波とされる時期でありました。そのような状況ではありましたが、大過なく視察が完了しました。そこで、今回の視察について2点を記しておきます。

- コロナ禍で経験を積んだ2年半、「ON LINE 視察」等の検討と実践は・・・。
(視察の目的・意義・方法の再検討)
- 議会公務での危機管理・・・。
(公務での出先での感染等のリスクにおける危機管理体制の構築)

令和4年8月18日

小野市議会議長 岡嶋 正昭 様

総務文教常任委員会
藤原 章

行政視察報告書

先般実施しました、総務文教常任委員会行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日

令和4年8月2日（火）～令和4年8月4日（木）

2 視察メンバー

委員長・喜始 真吾 副委員長・藤原 貴希
委員・河島泉 前田光教 藤原章 小林千津子
事務局・中村いづみ係長

3 視察先及び調査内容

- (1) 8月2日 愛知県岡崎市
人口：約38万5千人、面積：387.20km²（令和2年国勢調査）
・校内フリースクール「F組」について
- (2) 8月3日 愛知県半田市
人口：約11万8千人、面積：47.42km²（令和2年国勢調査）
・総合型地域スポーツクラブについて
- (3) 8月4日 東京都町田市
人口：約43万1千人、面積：71.55km²（令和2年国勢調査）
・バイオエネルギーセンターについて

4 調査結果

【第1日】

〈視察先〉

愛知県岡崎市 人口：約38万5千人 面積：387.20km²

〈視察項目〉

校内フリースクール「F組」について

〈視察内容〉

「すべての子どもに光をあてる」という教育理念のもと、「何らかの事情で学校や教室に来られない生徒に対して、誰一人取り残すことなく個別最適化された学びの場を保障し、多様な教育機会を確保するとともに、生徒が社会的自立に向かって歩き出すことができるようにしたい」という思いで、校内フリースクール「F組」を市内の中学校20校の内、令和2年度3校、令和3年度5校（計8校）、令和4年度6校（計14校）と設置してきた。全校への設置を目指しています。生徒は在籍学級があるが、在籍学級で勉強したければすればいいし、「F組」に行きたいと思えば行ってもよく、「F組」では何をするのは全く自由で「自分で考える」ことが大切とのことです。「校外にある市の適応指導教室、在籍学級、F組の3つを併用する生徒も増えている」とのことでした。大切なことは「多様性を受け入れられる担任」で、エース級の教員が担任するとともに、いつでも温かく迎えられるよう、市費で支援員を配置しているとのことです。

成果としては①長期欠席生徒数の増加が抑制された。②教職員の意識の変化や深まりで在籍学級の支援や指導の態勢が変化しつつある。③市の適応教室との段差軽減。などが挙げられています。

〈所感〉

学校に来たくない理由はいろいろあると思うので、校内でフリースクールを作っても子どもが学校に来るのか疑問でしたが、20人ぐらい対象のいる学校で、来るのは15人程度、少なければ5～10人ぐらいとのことでした。学校に来れなくて市の適応指導教室（ハートピア岡崎）に行く子もいるが、どこに行くかは子どもの自由で、上記のように併用する子どもが増えているそうです。説明されたのは元F組を担当されたことのある先生で、「学校に来られなかった子が、F組ならと来られるようになった」という例や、F組にきて何をするのは全く自由で、「子どもたちが自分で考えることが大切」という自立を目指す理念や、教師としても「デメリットはあまり感じない」「教育観が変わった」と言っておられました。

学校の規模もあって全部に適応できるとは思えませんが、小野市でも検討すべき課題だと感じました。

【第2日】

≪視察先≫

愛知県半田市 人口：約11万8千人 面積：47.42km²

≪視察項目≫

総合型地域スポーツクラブについて

≪視察内容≫

半田市では学校週5日制を視野に、学校と地域が連携し、少・中学生のスポーツ活動を総合的に支える事業体として平成8年に総合型地域スポーツクラブ「ソシオ成岩（ならわ）スポーツクラブ」が設立された（平成14年法人化）。それ以後、平成15年までに中学校区を単位とする5地区でスポーツクラブが結成されている。基本的に中学校の体育館を活動拠点にして「だれでも、いつでも、どこでも、いつまでも」スポーツに親しめるように4つの中学校体育館や、13の小学校体育館を開放して運営されている。

成岩地区では、中学校体育館の建て替えに際し、学校と地域の共同利用を前提とした総合型地域スポーツクラブハウスが整備された。学校は週末の部活動を休止し、クラブが土日の活動を希望する子どもたちの受け皿になっている。クラブの活動を支える財政は、地域住民の協賛会費が基盤となり、結成後6年間は市が財政補助をしている。

特徴として、小・中学生の多様なニーズに応えるために、中学校部活動にない種目を実施したり、アスリートによる質の高い指導プログラムも実施している。また、会員は全年代に渡っており、「街の部活動」として生涯スポーツの拠点になっている。

≪所 感≫

少子化で学校の部活動が難しくなる中で、地域全体で部活動を支えると共に、地域全体のスポーツ活動の発展（生涯スポーツ環境としての「街の部活動」）を図る構想に感心しました。5地区あるスポーツクラブの中で、最も古く、最も先進的なのが「ソシオ成岩（ならわ）スポーツクラブ」ですが、2003年に竣工した新しい体育館は、学校と地域の共同利用を前提として建設されており、更衣室やシャワーはもちろん、談話スペースも取られています。中学校部活動にはない種目として、硬式テニス、チアリーディング、ホッケーなども実施されています。クラブで育った子どもたちが大人になり、指導者として戻ってくるという好循環も生まれているとのことでした。施設の利用は、学校が使わないときは家族や個人が利用料を払えばいつでも使えることになっており（協賛会員はクラブが負担）、視察した当日も子どもたちが使っていました。小野市でも今後の方向の1つの参考になると感じました。

【第3日】

≪視察先≫

東京都町田市 人口：約43万1千人 面積：71.55km²

≪視察項目≫

バイオエネルギーセンターについて

≪視察内容≫

町田市は基本理念として、「ゴミになるものを作らない・燃やさない・埋め立てない」を原則として、徹底したごみ減量、資源化を進め、持続可能で環境負荷の少ない都市を目指すとしています。バイオエネルギーセンターは、ごみ焼却施設、不燃・粗大ごみ処理施設に加え、生ごみからバイオガスを発生させ、それを利用した発電を行っている先進的な施設で、今年（2022年）1月から稼働しています。もちろんごみ焼却時に発生する熱エネルギーを利用した蒸気発電も行っており、一部の蒸気は市立室内プールなどに送られています。バイオガス化施設は燃やせるごみからメタン発酵に適した生ごみなどを取り出し、発酵槽に投入して、微生物の働きで発酵させてバイオガスを発生させます。そのバイオガスを燃焼させてエンジンを動かし、発電機を回して発電します。

77,000m²の広大な敷地に、管理棟、不燃・粗大ごみ処理施設、熱回収施設（ごみ焼却施設）、バイオガス化施設が一行に立ち並び壮観です。現在は古い処理施設が残っていますが、2年ぐらいの間に取り壊され、緑の広場として整備される予定です。

≪所感≫

気候危機が叫ばれる中で、これからのごみ処理施設は少しでも気候変動原因物質の排出を抑えることが求められてきます。その根本的な対策として、ごみの減量化と資源化は非常に重要で、生ごみからメタンガスを発生させて、バイオエネルギーとして活用することは、ごみの減量化とともにエネルギー源としても一定の役割を果たすと考えます。町田市の施設では、屋外に巨大な発酵槽が2基設置されて、新たな可能性を感じさせます。

今、小野・加東・加西のごみ処理施設について、協議がされようとしています。生ごみのバイオガス化など新しい技術についても、検討の俎上に載せる必要があると思います。ただ、対象人口が全然違うので施設規模が違うと思われ、建設費用、ランニングコストなど不明なことも多いので、全国の状況を注視するべきだと思います。

令和 4年 8月 17日

小野市議会議長 岡嶋正昭 様

総務文教常任委員会
小林 千津子

行政視察報告書

先般、実施しました 総務文教常任委員会による行政視察結果について、
下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 令和4年8月2日（火）～令和4年8月4日（木）

2 視察メンバー

委員長	喜始真吾	副委員長	藤原貴希	
委員	河島 泉	前田光教	藤原 章	小林千津子
随行者	中村いづみ係長			

3 視察先及び調査内容

- (1) 愛知県岡崎市（人口：約38万5千人、面積：387.20k㎡）（令和2年国勢調査）
校内フリースクール（F組）について
- (2) 愛知県半田市（人口：約11万8千人、面積：47.42K㎡）（令和2年国勢調査）
総合型地域スポーツクラブについて
- (3) 東京都町田市（人口：約43万1千人、面積：71.55K㎡）（令和2年国勢調査）
バイオエネルギーセンターについて

4 調査結果

【第1日】 8月2日(火) 13時30分～15時30分

愛知県岡崎市(人口:約38万5千人、面積:387.20km²)

≪視察項目≫

校内フリースクール(F組)について

≪視察内容≫

F組設置の経緯について

⇒全国的に不登校児童生徒の増加が問題視されており、岡崎市においても大きな課題。

⇒教育長の教育理念「すべての子どもに光をあてる」

何らかの事情で学校や教室に来られない児童生徒に対して、誰一人取り残すことなく個別に最適化された学びの場を保障し、多様な教育機会を確保するとともに、生徒が社会的自立に向かって歩き出すことが出来るようにしたい。

F組の理念

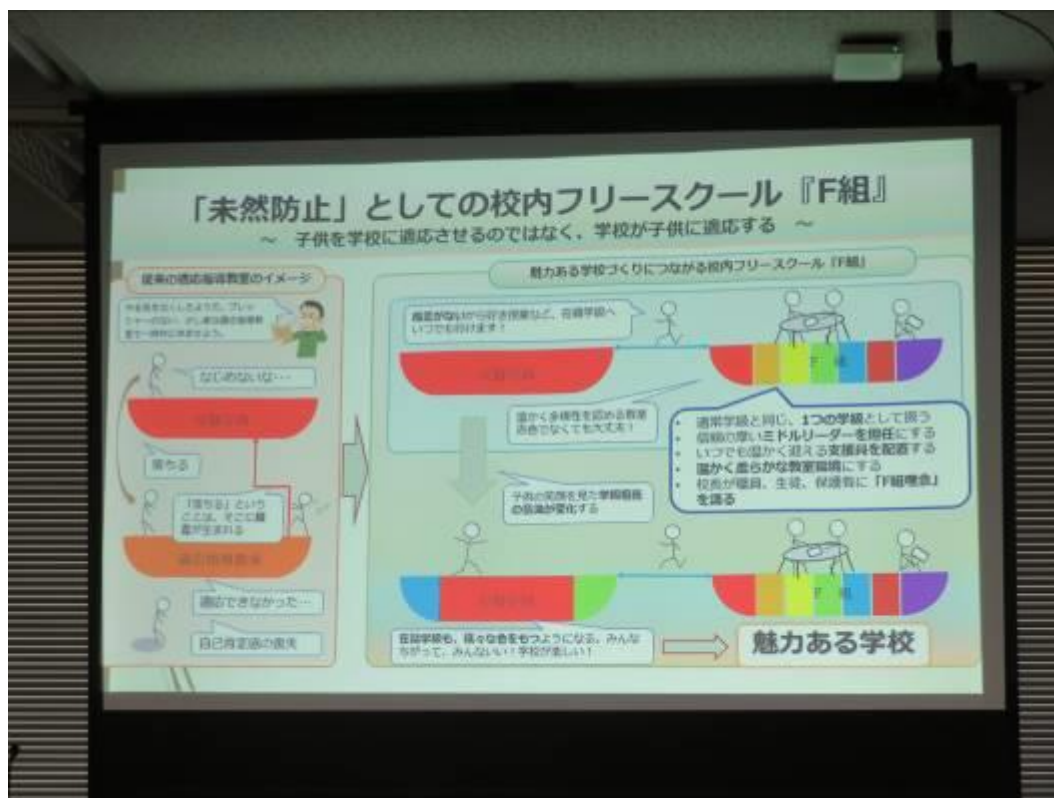
- ① 敵応するのは子どもではなく学校である
⇒適応指導教室ではない
- ② 通常学級と同じ、一つの学級として扱う
⇒子どもや教職員の意識を変える
- ③ 多様性を受け入れられる担任
⇒エース級の教員が担任
- ④ いつでも温かく迎える人がいる
⇒支援員を配置
- ⑤ 教室復帰でなく社会的自立を目指す
⇒1日の取り組みを自分で考える

設置状況について

- ⇒令和2年度 中学校3校設置
- ⇒令和3年度 新たに中学校5校設置
- ⇒令和4年度 新たに中学校6校設置

現在、市内中学校20校中14校設置。後の学校も設置希望

「未然防止」としての校内フリースクール『F組』



校内フリースクール（F組）の成果

- (1) 長期欠席児童生徒数の増加抑制
 F組設置校の増加率
 長期欠席者が増加傾向の中、新設校5校中2校が減少傾向に！
- (2) 教職員の意識の変化や深まりによる在籍学級の支援や指導の態勢の変化
- (3) 市の適応教室と在籍学級との段差軽減
 市の適応教室⇔F組⇔在籍学級を併用する生徒の増加

F組の理念の浸透を通して

F組が各学級のトップランナーとなることですべての学級の改革を図る

1. 多様性を受け入れる「居場所づくり」
2. 多様性を受け入れる「絆づくり」

F組の生徒が在籍学級とF組を行き来することにより、在籍学級も、様々な色を持つようになる

みんなちがって、みんないい！学校がたのしい！

《所 感》

「Fit, Free, Fun, Future」の頭文字を取ってつけられた『F組』。長期欠席者や、集団に馴染めない子どもに、個別最適な学びの場を保障、多様な教育機会を確保するために設置された校内フリースクール。

岡崎市の中学校の20校中、2020年度に3校が設置され、23年度には市内全中学校にF組を整備する予定とお聞きしました。増設が続くのは、やはり成果が出ており希望者があるということでしょう。在籍学級に通えなくなった子にとって、適応教室に行くことは、1段階落ちる感覚。その段差はとても大きく在籍学級に戻ることを難しくしているが、在籍学級と並列関係にあるという位置づけで多様性を認めるF組が出来てから、郊外にある市の適応指導教室、在籍学級、F組の3つを併用する生徒が増え、自分の居場所を選びやすくなったのではないかと相談支援所長のお話でした。

「F組と在籍学級を自由に行き来が出来ること」が、不登校の未然防止に繋がっており、多様性を受け入れ、教室復帰ではなく、社会的自立を目指す子どもを育てるとの理念が分かりました。子どもにとって、とてもいい環境だと考えますが、当市においては先生の加配等の問題が発生するのではと考えます。



説明を受ける



岡崎市役所前にて

【第2日】 8月3日（水） 13時00分～15時30分
愛知県半田市（人口：約11万8千人、面積：47.42 km²）

《視察項目》

総合型地域スポーツクラブについて

《視察内容》

スポーツクラブ育成の取り組み

(1) 取り組みの経緯

- ・平成6年度 成岩地区に於いて学校と地域の自発的な取り組みとしてのクラブづくりが始まる（成岩地区少年を守る会の総会で構想発表）
- ・平成7年度 成岩地区少年を守る会が文部省指定「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」の推進母体となる



- ・平成15年2月 市内5中学校区すべてでスポーツクラブ設立

(2) 各スポーツクラブへの補助金交付額

各中学校区の取り組みに対し、市独自の補助金を概ね6年間に渡って交付

(3) スポーツ振興計画における位置づけ

◎スポーツ振興の目標

地域型スポーツクラブへの加入率の向上

小中学生の60%以上を含む、市民加入率20%の達成

半田市スポーツ推進計画

基本理念

「だれでも、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに親しめるように」

総合型地域スポーツクラブと中学校部活動の連携について

これまでの経緯

平成6年

半田市校長会は、「小中学校部活動検討委員会を」発足し、5か年に渡り完全学校週5日制実施化での学校部活動のあり方を研究。



平成11年3月

半田市小中学校部活動検討委員会は、学校週5日制の趣旨を踏まえて、部活動は土日祝日には実施せず、児童活動を地域や家庭に反し、生活のゆとりを確保することが大切と答申。



平成14年3月

半田市スポーツ振興計画を策定、上記の答申を尊重し、原則、部活動は、

土日祝日には行わず、中学生がスポーツをする場合は、地域のスポーツクラブで活動することとした。



様々な問題や課題が発生



第2次半田市スポーツ振興計画の作成時や、その計画により設置したスポーツ振興審議会において、委員にそれぞれの立場からいただいた意見を基に、課題やその原因を整理し、課題解決を図るための方向性を検討。



平成24年4月1日

中学校部活動について運用を次のように改正

「これまで、原則的に土曜日、日曜日の学校部活動は行わないこととしてきたが、祝日も含め、学校長の判断によって部活動として実施することができることとする。」

その後、平成23年に学校側の土・日の部活動再開によって、現在は部活動以外の活動を幅広く行う形で、部活動と共存しながら共同利用施設を拠点として総合型クラブを運営している。

平成8年3月に設立された、総合型地域スポーツクラブ「ソシオ成岩スポーツクラブ」に現地視察の場所を移す

NPO法人ソシオ成岩スポーツクラブ

取り組み

生涯スポーツ環境としての街の「部活動」へ

学校の部活動から街の「部活動」へ

地域の子供たちを地域ぐるみで育てる！

クラブ設立の経緯

1. 1995年、学校と地域が連携、小中学生のスポーツ活動を総合的に支える事業体として、1996年にクラブを設立
2. 学校は週末の部活動を休止、クラブが土日の活動を希望する子どもたちの受け皿となった
3. 2002年法人化、2003年12月クラブハウス完成

クラブの特徴

1. クラブ運営（協賛会員）

地域住民の13%にあたる約2900名の会員が持ち寄る会費が財政
基盤53名のボランティアアシスタント
全ての子供たちの活動機会を保障する制度
恵まれない家庭へのクラブ扶助制度

2. 小中学生の多様なニーズに応える取組

中学校部活動にない種目も実施
アスリートによる質の高いプログラムの実施

3. 生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現

クラブで育った子供たちが大人となり指導者として戻って来ると言う
好循環が生まれている

4. 地域課題の解決を目的として子育て支援や子供達のキャリア教育に関する取組

クラブハウス建設の経緯

地域の要望により、中学校体育館の建て替えに際し、学校と地域の共同利
用前提としたクラブハウス（社会体育施設）を半田市が整備

クラブハウスの特徴

○クラブハウスとしての運用

常時クラブがプログラムを展開する
多世代にわたる地域コミュニティの区間となる

○貸館なし、利用料金制度

占有利用を廃止、家族、子ども達が、個人でいつでも使える
1回大人：720円 小人：308円
ソシオの利用分はクラブが負担

○学校との共同利用施設

複合化により効率的な利用が行われている
地域と学校との距離感を縮め、児童生徒を身近に感じる

経験値と可能性

新しい部活動のあり方

地域化した部活動の実施主体を総合型クラブが担い、地域、学校、行政が連携し、併せて多世代にわたる住民スポーツサービスの充実を図る。

学校と連携し、拠点とするコミュニティ・スクールクラブへ

《所 感》

半田市も中学生の部活動について年代により、またそれぞれの立場の違いから判断が変わってきたようです。平成24年4月から部活動の運用を、「これまで原則的に土曜日、日曜日の学校部活動は行わないこととしたが、祝日も含め学校長の判断によって部活動として実施する事が出来ることとする」と改正されたように、多様なニーズに合わせた形でのスポーツクラブが出来、現在のコミュニティ・スクールクラブとなったようです。

現在、当市にとっても、中学生の部活動は子どもの成長過程において大変重要との思いはありますが、教員の負担が大変大きいと考えます。

土曜日、日曜日の部活動は、地域のボランティアへの依頼や、スポーツによっては専門の指導者への依頼をすればいいのではないかと考えます。

必要な経費は、市の予算を計上してでも子どもたちのスポーツ精神は延ばしていきたいです。



成岩スポーツクラブ



半田市役所前にて

【第3日】 8月4日（木） 13時00分～15時30分
東京都町田市（人口：約43万1千人、面積：71.55 km²）
町田市バイオエネルギーセンターでの視察

《視察項目》

バイオエネルギーセンターについて

《視察内容》

町田市バイオエネルギーセンターで説明を受ける

首都圏初の乾式メタン発酵による都市ごみ処理施設として日本へ、
そして世界へ誇るバイオエネルギーセンター

基本理念

「ごみになる物を作らない・燃やさない・埋め立てない」を原則として徹底したごみ減量・資源化を進め持続可能で環境負荷の少ない都市を目指します。

基本方針

市民、事業者との連携を強化し、協働による取組をすすめる。

家庭系、事業系のごみの減量

環境に配慮した資源化施設を整備、適正かつ安全な処理

社会的課題への対応を強化

町田市では、地域や地球環境を守るためにごみになる物を作らない

- ・燃やさない・埋め立てないを市の理念とし、生ごみの減量の取り組みとして生ごみ処理機や、たい肥化容器を活用した家庭での自家処理を進めています。それでも出てしまった生ごみを資源化するためにバイオガス化施設を導入した。

施設概要

敷地面積	約 77,000 m ²
述べ面積	工場棟 約 17,000 m ² 管理棟 約 6,100 m ²
階数、高さ	工場棟地下 2 階、地上 5 階建て、高さ約 28m 煙突高さ 100m 管理棟 地上 4 階建て高さ 20m
施設規模	熱回収施設（焼却施設） ストーカー式焼却炉 258 t / 日（129 t / 日 × 2 炉） バイオガス化施設 乾式高温メタン発酵 50 t / 日 不燃・粗大ごみ処理施設 機械選別・手選別 47 t / 5h
設計・施行	株式会社タクマ

1982年に開設された「町田リサイクル文化センター」の施設老朽化に伴い、2017年から市が整備、4年以上の工事を経てバイオエネルギーセンタ

一を完成。当施設正面の公営プール「町田市立室内プール」では、プール第一駐車場後に施設を増築する。当センターで発生する熱エネルギーを利用し、入浴施設を完備した「健康増進温浴施設」を、2022年4月にオープン。温浴施設は、1階に駐車場、2階に男女浴場やサウナ、3階に多目的室を設置。2階はプール棟と連絡通路で繋げ、両施設を行き来できるようになっている。

《所 感》

令和4年1月から稼働の真新しいバイオエネルギーセンター。建設費用300億円、バイオ化の費用35億、町田リサイクル文化センターの跡地に4年以上の工事を経て建設。15町内会のごみ処理を行っている。

始めに小学生にも分かるようにと、工場内を動画で説明を受け、その後場内へ。ごみ処理の流れとバイオ化施設を見て廻りました。

今後、3市でのクリーンセンター建設問題が浮上されてきますが、大変興味深く視察させていただきました。当市で取り入れたいと思うのは、1番にとっても分かりやすく説明されている動画です。場内にある参加者への質問にも関心を持ちました。日々生活する中で個々に気をつけてごみを減らしていけるか考えさせられた視察でした。



町田市バイオエネルギーセンターの全貌

エネルギーセンターを動画で説明



流れを図で説明



クレーンの大きさを体感



総務文教視察参加者 6名
町田市バイオエネルギーセンター前にて

大変詳しく、丁寧な説明を受けました。

所々に見学者が参加出来るコーナーが設けられ、小学生でもごみ処理に関心を持って見学できます。

猛暑と、コロナ禍の中、多忙な現場の中、気持ちよく視察をお受けいただき感謝です。